

郷中（ごじゅう）教育

― 歴史を訪ねる旅（19）

下土橋 渡



少子化が進み、子供たちの異年齢交流の減少や地域との結びつきの低下が叫ばれるなかで、異年齢集団活動による青少年育成の試みが全国各地で行われている。

鹿児島には、『郷中教育』（ごじゅうきょういく、あるいは、ごちゅうきょういく）という薩摩藩伝統の縦割り教育があった。郷中とは、『方限』^{ほうぎり}と呼ばれる区割りを単位とする自治組織のことで、今でいえば町内会単位の自治会組織と考えればよいだろう。当時、鹿児島^{鹿児島}の城下には数10戸を単位として、およそ30の郷中があったといわれている。

一、『泣こよかひっ飛べ』

1947年〜49年生まれの、いわゆる団塊の世代である筆者が小学校、中学校時代（昭和30年代）には、鹿児島県内の田舎にもたくさんの子供たちがいた。お兄さんやお姉さん、弟や妹たちと連れだって遊びにいくと、田んぼに用水路がある。

まずお兄さんたちが飛び越えてみせる。つぎに、年下の者が飛ぶのに躊躇していると、周りの者が『泣こかい、飛ぼかい、泣こよかひっ飛べ』と囃し立てる。これは、困難に出会った時はあれこれ考えず、とにかく行動しろという薩摩人の思考法をあらわす言葉で、今にして思えば、郷中教育の名残だった。

また、鹿児島県内では、たとえば神社の掲示板などに、①負けるな、②嘘をつくな、③弱い者をいじめるな、という3つの言葉が大きな字で掲示されているのをよく目にする。

これもまた、郷中教育の教えを今に伝えている言葉である。

二、外城制度と薩摩藩の教育

薩摩は武の国として知られたが、一つの城楼も天守閣もなかった。鹿児島市内にある鶴丸城は、城という名はつくものの、単純な構造の屋形造りの城で、世人は『お屋形』と呼んだ。

これは、一つには裏に城山があつて天然の要害となつていたことにもよるが、『人は城人は石垣、人は壕』という標語があつたように、人間こそが城砦であり、人間こそが塁壁であり、人間こそが壕渠であると考え、防御の根本を人間の配置においたからだつた。

すなわち、薩摩藩は、鶴丸城を本城とし、領地を外城とじょうと呼ばれる 113 の行政区域に分け、武士団を分散してそれらの領地内に住まわせ統治に当たらせた。麓集落ふもとと呼ばれる



麓の風景（下甕手打の武家屋敷通り）

ミニ城下町が形成され、その中心に地頭の居館である地頭仮屋が置かれ、ここで外城の行政が行われた。現在でも県内各地でその面影を見ることが出来る。

したがって、藩においては、士民に領国の防衛意識を高揚させるための教育と、中央集権の実をあげる政治との連用が必要だった。教育と政治は密接に関係し、いわば政教は不可分の関係にあった。

薩摩藩における教育政策の一つに、第8代藩主・島津重豪しげひでが設立した藩校・造士館の制度があったが、藩政の上に顕著な効果を示したのは郷中教育だった。

交通未発達時代に、日本列島最南端のいわゆる僻地が、多くの偉人傑士を輩出し、明治維新の最も有力な推進力となり得たのは、一に郷中教育の制度が全薩摩藩に広がり、その精神が徹底していたからに他ならなかった。

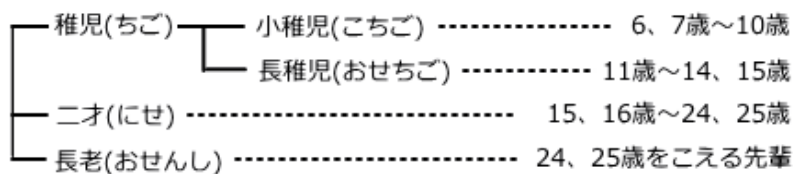
三、郷中の生活と教育

郷中は、青少年を『稚児ちご』と『二才にせ』に分けて、勉強・武芸・山坂やまざか達者たつしや（今でいう体育・スポーツ）などを通じて、先輩が後輩を指導することによって強い武士をつくろうとする組織だった。

稚児は年齢によってさらに、小稚児こちごと長稚児おせちごに分けられ、稚児のリーダーとして稚児頭ちごがしらがいた。また、二才のリーダーとして二才頭にせがしらがいて、二才と稚児の面倒をみた。

稚児と呼ばれる武士の子どもたちは、毎日早朝、郷中内の先生の家へ走っていつて本読みを習い、家に帰ってくると朝食までそれぞれ本読みの復習をしたり家事を手伝ったりして過ごす。

朝食がすむと今度は、馬場と呼ばれる広場や神社の境内などに集って、馬追いや降参言わせ、相撲、旗とりなどによって身体を鍛え



稚児と二才と長老

る。午後は、共に誘いあつて、先輩や先生の家(復習座元)に集まり読み書きの復習をする。その後、稽古場へ行き夕方まで、剣(示現流)、槍、弓、馬術など、武芸の稽古を行なった。

長稚児たちは、夕方から二才たちが集まっている家(夜話の座元)に行つて、郷中の掟を復唱したり自分たちの生活を反省したりした。武士の子としてよくない行いがあれば二才たちから注意を受け、場合によっては厳しい罰を受けることもあった。

武士の子どもたちは、一



薬丸野太刀自顕流演武 (2009.5.17 東京・東郷神社)

日のほとんどを同じ年頃や少し年上の人たちと一緒に過ごしながら、心身を鍛え、躰・武芸を身につけ、勉学に勤しんだ。年長者は年少者を指導すること、年少者は年長者を尊敬すること、負けるな、うそをつくな、弱者をいじめるなということなどを、人として生きていくために最も必要なこととして教えた。

二才同志は、互いに戒めあい、修身の道に各々自重するとともに、二才頭を中心にして互いに熟議し、郷中に起る一切の問題を処理した。二才たちの手でどうしても処理しかねる時には、長老を訪ねて適宜指導を仰いだ。

このように、郷中教育は、集団のなかでおこなわれ、教師のいない、異年齢によって行われた自治的な教育であったことを特徴とした。

なお、鹿兒島言葉で、大根のことを『デコン』、野菜のことを『ヤセ』、臭いを『クセ』、西郷を『セゴ』などと、約転している。郷中

を『ごじゅう、ごちゅう』と読み、二才を『ニセ』と読むのも、この地方方言の特質による。

また、二才は、ボラなどの魚が二年を経て、ようやく成長魚になったばかりの若魚を意味し、これになぞらえ、一人前の付き合いを認められた若者衆を意味している。

四、郷中のはじまりから成立まで

『郷中』という言葉が使われるようになり、郷中教育が完成をみるのは、江戸時代中期の安永年間（1764～80年）だが、そののはじまりは、戦国時代の伊作島津家（現在の日置市吹上地域の一部）の10代当主・島津忠良（日新公、1492～1568年）が試みた青少年の志操教育にあった。

島津氏中興の祖といわれ、文武兼備の名将だった忠良公は、神仏の崇敬篤く、神仏儒の三教を良く学び、『薩摩学』『日学』を提唱し、薩摩独特の土風と文化の基盤を築いた。その



日新公いろは歌・歌碑（南さつま市竹田神社）

内容は、忠孝仁義を説き、この実践を奨励するもので、48歳から55歳の間に作ったといわれる『いろは歌』にその思想が遺憾なく謳うたわれている。

『古いにしえの道を聞きても唱なへても我が行にせずば甲斐なし』ではじまるいろは歌は、郷中教育の規範となり、現代にも大きな影響を与えているといわれる。

日新公は、毎月五、六度、諸子の子弟を城中に召集して、四書の講義をし、『義理ノ咄はなし』『忠義人ノ咄』などを話して聞かせたという。日新公によつてはじめられたこの『咄』の会合の試みは、公の遠逝とともに中断したが、これを新しい形式で復活すべき事情が起きてくる。

文禄元年（1592年）、太閤秀吉が朝鮮遠征を断行すると、薩摩から義久公・義弘公・忠恒公を始めとして一万余騎の精兵が朝鮮に

渡った。戦争が10年に近い長期間に及ぶに至って、後に残留した青少年の風紀が乱れてきたのである。この時、留守居役を任されていた新納忠元は、そのことにいたく責任を感じ、風俗改善を決意する。

この目的を達成するために、忠元は、少年時代に日新公を中心として催された『咄』の会合を思い起こし、青少年たちの間に集団を結成し、その各員が何事に限らず腹藏なく話し会える組織をつくり、これを『二才咄』と名付けた。

さらに、日常守るべき数条の規約を定め、これを『二才咄格式定目』と名付け、実践させた。二才仲間はそれぞれ集団を組織して研磨に励んだが、『二才咄』への出入りは、比較的自由であり、統制のための規律もなく日常生活における成員の行動は、各自の恣意に任されていた。その状態は江戸時代の元禄5年

(1692年)頃まで及んだようである。

しかし、太平になれた元禄時代の華美の風潮に風紀は乱れ、元禄15年頃には、怒涛のごとく蔓延した悪風潮は容易に改まる様子もなかった。そのため、成員の生活・行動は厳しく規律によって制約されるようになり、第4代藩主吉貴公は、宝永4年(1707年)に、『御袖判条々』という布達を出して、二才衆が交友で遠方に行くことを禁じた。

行動範囲に地域的制限を設けたことによって、『方限』という概念が生まれた。すなわち、『方限』は、二才衆の不行跡・喧嘩等を取り締まる目的をもって起きて来たものということが出来る。

ついに『咄相中掟』の条項に、この『方限』の概念が取り入れられ、宝暦4年(1754年)に『稚児相中掟』が出される。この年は、薩摩藩が幕府から木曾川治水工事(宝暦の治

水工事」の命を受けた翌年のことだった。こうした経緯を経て、第8代藩主・島津重豪公の安永年間に郷中教育が完成した。

五、薩摩のエピソード

薩摩出身の軍人・政治家、樺山資紀すけのり伯爵を祖父に持った随筆家の白洲正子さん（1910～198年）は、津本陽さんの著書『薩南示現流』（1983年、文藝春秋刊）に出てくる逸話を自伝で紹介している。

「幕末、指宿藤次郎という示現流の使い手が京都祇園で見廻組に殺された。その時同行していた前田某という若侍はいち早く遁走してしまった。指宿の葬儀の場に、橋口覚之進という気性のはげしい若侍がいて、『お前（おはん）が、一番線香じや。先（さきイ）拝め』
 といって、参列者の中から前田を呼出した。

前田がおそろおそろ進み出て線香し、指宿の死体の上でうなだれていると、橋口は腰刀

を抜いて、一刀のもとに前田の首を斬ったという。首はひとたまりもなく、棺の中に落ちた。『こいでよか。蓋をせい。』」

白洲さんは、何とも野蕃な話であるが、橋口にしても、前田にしても、そうしなければならぬ理由があった。郷中教育を受けた者にとつて、この葬儀の場合は、葬儀というより一種の儀式で、参列者は元より、斬る方も斬られる側も、すべて暗黙の了解のもとにあり、『こいでよか』のひとつですんだのであろうと述べている。

何より卑怯・卑劣をいやしむ郷中教育の教えからして、前田の行為は最も恥すべき行為であり、そして郷中教育の教えがそれほど徹底していたということであろう。この話に出てくる橋口覚之進なる若侍こそ、樺山家へ養子入する前の祖父（樺山資紀）の若き日の姿だったそうだ。

郷中教育では、『座頭講』という催しも行われた。座頭とは盲人の琵琶法師のことで、座頭を招いて薩摩琵琶を弾かせそれを聴くのである。間断のない文武の講習、身心の鍛錬に対して慰安の油を差し込む催しであった。

日清戦争の連合艦隊司令長官だった伊東祐亨元帥は、降伏を決めて服毒死を遂げた清国・北洋艦隊提督の丁汝昌の遺体を送らせるため、没収した軍艦の中から商船を外して提供した。

その礼節は世界を驚嘆せしめたのだが、大本営は伊東長官のこの独断の処置を不当とし、電報を打ってその故を質した。それに対し、伊東長官はただ一言、『武士の情』と返信したので、大本営はそのまま黙ってしまったそうである。後年、同元帥は、『これも全く琵琶歌によって培われた武士道精神の發揮にほかない』と語られたそうである。

六、現在も伝承されている郷中教育の行事

郷中では、3つの大きな行事が行われていた。一に『曾我傘焼』、二に『妙円寺詣り』、三に『義臣伝読み』である。

第一は、鎌倉時代に相模国の曾我兄弟が父の仇討ちを遂げる際、傘を焼いて松明がわりにしたという故事を懐かしみ、孝道の真髓を嘆賞する行事だった。第二は、関ヶ原の戦いで豊臣方として戦った島津義弘公勢が徳川方の敵中を突破し帰鹿を果たした遺徳を慕い、不撓不屈の敢闘精神を練磨するものだった。第三は、赤穂義士の苦衷と遠謀を偲びつつ忠魂の修練に資した。

このうち、『曾我傘焼』と『妙円寺詣り』の行事は現在も伝承されて実施されている。『曾我どんの傘焼き』は、毎年7月下旬、鹿児島市内を流れる甲突川の川べりの櫓に岐阜



曾我どんの傘焼き (2006.07 鹿児島市)

県和傘振興会などから寄せられた和傘を積み上げ火がつけらる。炎が夜空高く舞い上がり、夏の川面を赤々と焦がすと、人々は、五穀豊穡と洪水無災害を祈願する。

また、毎年10月に行われる『妙円寺詣り』では、鹿児島市内から義弘公を祀る日置市伊集院町の妙円寺（現在の徳重神社）までの片道約20キロを歩いて参詣する。

（元九州職業能力開発大学校教授）

【参考文献】

- （1）松本彦三郎著『薩摩精神の真髄 郷中教育の研究』（株）島津興業・尚古集成館、2007年発行
- （2）白洲正子著『白洲正子自伝』（新潮文庫、1999年発行）